

乳牛にみられた両側性卵巢腫瘍の一症例

誌名	長野県畜産試験場研究報告
ISSN	03893545
巻/号	24
掲載ページ	p. 23-24
発行年月	1996年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



乳牛にみられた両側性卵巢腫瘍の一症例

西條勝宜・平澤博一・吉田宮雄・井出忠彦・三井一平

A Case of Ovarian Tumor in a Dairy Cow

Katsuyoshi NISHIJYO, Hirokazu HIRASAWA, Miyao YOSHIDA, Tadahiko IDE and Ippei MITSUI

牛では生殖器の腫瘍は稀であるが、ときには卵巢、子宮、膣、外陰部などに発生がみられる。発生率についてはスウェーデンの大学で調査した6,286例の牛生殖器のうち、子宮の腫瘍が44例(0.7%)、卵巢の腫瘍が13例(0.2%)という報告がある¹⁾。卵巢の腫瘍については血管肉腫、線維腫、顆粒膜細胞腫、リンパ肉腫、未分化細胞腫などがあり、顆粒膜細胞腫は最も普通にみられ、子牛でも老牛でも発生する²⁾。

今回、著者らは未分化細胞腫と顆粒膜細胞腫の混合型と思われる両側性の卵巢腫瘍に遭遇したので、その概要を報告する。

症 例

1. 症 例 牛

乳用牛ホルスタイン種未経産牛。

2. 経過および症状

この牛は県内の育成牧場で育成され、黒毛和種と自然交配した後、1991年11月に当場に導入した。導入後、不規則な発情様粘液や射乳がみられ、また、思牡狂を呈するなどの異常がみられた。直腸検査では腹腔かぶ妊娠子宮と思われる臓器の一部を触診した。日数が経過しても分娩徴候がみられないため、診断的に開腹(腰角下切開法³⁾)したところ、多量の腹水を認め、巨大な腫瘍が触診されたので、その摘出を試みたが、出血多量のため弊死に至った。

3. 解剖所見

左卵巢は巨大に腫瘍化し、大きさは長径約40cm、短径約30cmで、重量は約6kgであった。(写真-1)

断面は大小の嚢胞の密在しており、黒い液状物の内包がみられた。また、右卵巢も腫瘍化し、大きさは左の卵巢に比較して小さいものの直径約25cm、重量は約

3kgであった。右卵巢の断面は左卵巢と比較して、嚢胞の密在はみられないが、凝固した血液を内包する嚢胞がみられた。なお、子宮・卵管については、所見的に異常はみられず、また、他の臓器についても異常はみられなかった。

4. 卵巢の病理組織所見

細い間質結合織に囲まれて、ゆるく集合した大型の細胞が蜂巣状に増殖していた。細胞は大型の丸い核と大型の類円形から多角形の細胞質を有し、核小体は明瞭であった。核の大小不同や核分裂像が多く、壊死巣が多発し、細胞が一個から数個単位で間質に増殖する像も認められた。間質には僅かにリンパ球の浸潤がみられた。また、部位によっては比較的サイズの揃った腫瘍細胞が間質と接する部で索状配列をしたり、管腔の形成がみられた。(写真-2)

考 察

本症例は腫瘍細胞の形態から未分化細胞腫が疑われたが、症状としては顆粒膜細胞腫の症状¹⁾²⁾に合致するものであり、未分化細胞腫と顆粒膜細胞腫の混合型と考えられる。しかし、顆粒膜細胞腫は腫瘍細胞が部位的に様々な形態を示すものがあり⁴⁾、本症例の腫瘍の診断について検討の余地があると思われた。

一方、顆粒膜細胞腫の場合、大きさは顕微鏡的なものから、重さ11kg以上に及ぶものまでである²⁾が、今回報告した症例は腫瘍が大きく、しかも左右の卵巢に腫瘍がみられた両側性であり、極めて稀なケースと思われた。

終わりにあたり本報告のとりまとめに際し、ご指導、ご助言を頂いた松本家畜保健衛生所病性鑑定室、青柳獣医師に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) テレビドクター写真でみる乳牛の病気100(1982)
DAIRYMAN臨時増刊号 176-177 デーリィマン社
- 2) 大森常良他編(1987) 牛病学 970 近代出版
東京
- 3) 高桑一雄(1987) 家畜臨床 処置と手術の要領改訂増補 208-209 株式会社共済薬事 東京
- 4) 大森聖円, 浅田恒夫, 松井司(1992) 牛の顆粒膜細胞腫の一種について(平成3年度日本獣医公衆衛生学会講演要旨-中部) 日獣会誌VOL.45 NO.6 435



写真1 腫瘤化した左卵巢

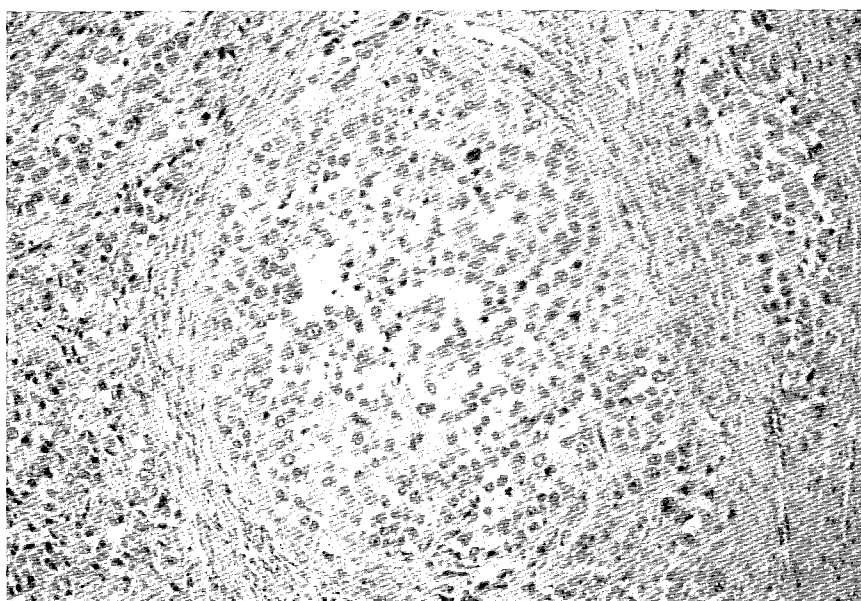


写真2 左卵巢の組織像